

紙面

センサ

新年度を迎え、社会構造と技術の転換点に差しかかる。少子高齢化が社会や企業に影響を及ぼす「2025年問題」が懸念される中、「ベータ世代」(25年以降生まれ)の幕開けとなる。人工知能(AI)技術が進展し、日常生活に深く関わってくることも予測され、経済や社会のあり方を大きく左右するだろう。

社会の持続的な発展には、DEI(Diversity)「Equity」[Inclusion]＝多様性、公平性、包摂性)の推進が不可欠だ。多様な価値観を受け入れ、公平な機会を提供し、全ての人が社会の一員として活躍できる環境を整えることが、人口減少や労働力不足といった課題を解決する鍵となる。しかし、世界的にはDEIを後退させる動きも見られる。逆差別への懸念から、一部の企業では施策を見直す動きが広がっている。問題の背景には、「DEIの目的や意義が十分に理解されていない」との指摘があり、認識の共有が求められる。

3月15日朝刊とうほく・総合面に「見えぬマジョリティー特権」との記事が掲載された。河北新報社内で行われた勉強会では、自動ドアを例にマジョリティー(多数派)の人々が「目的地向かうとドアが次々開くので、ドアの存在にも、ドアが毎回開くことにも気付かない」と指摘。これを「特権」と定義している。一方、特権を持たないマイノリティー(少数派)は、自らドアを開けなければならぬため、時には前進を阻まれる

多様な価値観 発信望む

普段、当たり前だと感じる環境や制度には、特権が内在している可能性がある。現在、マジョリティーの立場にある人々も、将来的にはマイノリティーとなる可能性があり、その変化は決して人ごとではない。日常の中にある特権に気付くことが今後の社会において重要なことだろう。こうした視点を反映させた記事の掲載が大いに期待される。

3月24日みやぎ面では、「栗原・パートナーシップ第1号 男性カップル」が紹介された。異性愛者のマジョリティーが、無意識に使う「結婚は？」などの言葉が、少数派であるLGBTQ(性的少数者)とコミュニティに与える影響に気付く必要がある。社会全体で、異なる個々の立場を理解し合うことが求められている。

紙面を通じて、DEIの目的や意義について考える機会を提供してほしい。多様な価値観を尊重し、全ての人に公平な機会を与える社会の実現に向けて議論が深まることを期待される。読者一人一人が個々の立場や背景を理解し、共に考える場として、この議論が広がることを願いたい。



東北福祉大
総合福祉学部教授

関川 伸哉

せきかわ・しんやさん 1967年仙台市生まれ。早大理工学研究科修士。東北大医学系研究科修士。専門はリハビリテーション科学、障害者福祉。豪ラトロープ大学外研究員を経て2014年から現職。05年から障害高齢者の姿勢保持や高齢者のための車椅子(P-Smile)の開発に従事。社会福祉法人一歩一歩福祉会理事も務める。宮城県寛谷町在住。

この批評は河北新報の最終版(朝刊16版、夕刊)をもとにしています。